

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24330243

研究課題名(和文) 基層文化概念を核とした〔伝統的な言語文化〕の系統的実践モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of the systematic practical model in "Traditional language Culture" centered the concept of basic culture.

研究代表者

藤森 裕治 (FUJIMORI, Yuji)

信州大学・学術研究院教育学系・教授

研究者番号：00313817

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はわが国の基層文化概念を核として、全校種に設置された国語科の指導事項である「伝統的な言語文化」の系統的実践モデルを構築することを目的として行われた。実施に当たっては、海外の比較参照事例としてイギリスが選定され、同国における伝統文化と人格教育に関する実践及び教育課程をわが国に应用する方途が探究された。その成果はケンブリッジ大学との連携によって刊行された。また、国内の全校種における教育研究を実施し、小学校から高等学校へと効果的に接続するための教科書分析、授業研究、カリキュラム開発等が行われた。さらに、幼児教育へと視点を広げ、伝統文化にかかる子供向けの図鑑を刊行して社会的な普及に努めた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project was construction of the systematic practical model in "Traditional language Culture". This project took three approaches as follows.

1:Comparative research between U.K. and Japan. We visited U.K. 4 times, and researched practices and curriculum about Traditional Culture and P.S.H.E. The outcomes of this research was published "Creating Learning without Limits" that was cooperated with Cambridge University's staffs. 2:Practical research in Japanese classrooms: We have researched all types of schools in Japan. And then We collected huge cases of learning about Traditional language Culture. The outcomes of this efforts especially contributed to the discussions of central educational committee of MEXT. 3:We succeeded applying to the infancy education about Traditional language Culture. For example a picture book about traditional culture was published.

研究分野：国語科教育

キーワード：国語科教育 伝統的な言語文化 基層文化 実践モデル 系統化

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 基層文化概念について

「基層文化」とは「民族的な日常伝承文化のうち、当該民族における精神世界の基礎をなすもの」を指す。日本の基層文化について、例えば芳賀紱は「自然との調和・他律的な関係重視・非言語的伝達の重視・自己修養の精神・陰影余情の愛好」といった五つの観点からこれを捉えている(芳賀,2004,日本人らしさの構造,大修館書店)。内山節は、豊作と大災害という二面性をもった我が国の自然環境によって、日本人は一つの事象に相反する性質が存在することを多層的・多相的に受容する精神性を育ててきたとする(内山,2005,「里」という思想,新潮選書)。研究代表者の藤森裕治は、日本と東アジアの神話・説話、及び生業体系を文化論的に比較検討し、日本民俗には死や破壊を伴う危機的な事態を新たな生産体系創出の契機としてとらえる観念があることを指摘している(藤森,2000,死と豊穡の民俗文化,吉川弘文館)。また、このような観念は国語教科書における登場人物の扱いや日本の映像文化においても認められることを発見し、国内外の学会で発表している。こうした、一つの事象に共在する破壊性と創造性を受容する態度は、未曾有の災害に襲われる今日にあって、様々な苦難を乗り越えて生きる力の源泉として誇るべき、我が国の精神文化遺産と考える。

### (2) 「伝統的な言語文化」について

改訂学習指導要領が完全実施年度を迎え、各地で「伝統的な言語文化」にかかる実践が始まっている。学習指導要領の改訂に際しては研究代表者の藤森も改善協力者として加わり、この指導事項の策定にあたり、日本の基層文化と言語文化との関係について知見を提供している。また、研究分担者と共に全国各地の教育委員会等で「伝統的な言語文化」の学習指導に関連した講演・授業研究を重ね、文科省の調査で70%にも及ぶ高校生の古典学習嫌いを改善させるための知見を示唆してきた。学会活動では、日本の基層文化に関する先行研究を通覧すると共に、国語教科書に登場する日本文化関連の語彙及び教材を悉皆調査し、その傾向特性を分析した。また、伝統文化に関する海外の実践を調査して、「伝統的な言語文化」を国際標準学力の観点から捉えた場合の指導目標を検証し、日本の基層文化概念を活用した当該指導事項の系統化を考察してきた。

### (3) 本研究の位置づけとねらい

本研究では、こうした活動と研究成果を発展させ、中学校・高等学校における改訂学習指導要領の完全実施年度(平成24~27年度)に併行して、学校間連携を視野に入れた「伝統的な言語文化」の系統的实践モデルを構築することを企図して行われた。実践モデルをもとに小・中・高等学校すべての実践場面で「伝統的な言語文化」の授業研究を行い、学年段階ごとに取り上げるべき日本の基層文

化概念と教材・学習活動とを解明する。それにより、児童生徒が、予測不可能な社会環境をたくましく生きることのできる言語人格を獲得できる国語科授業の創造に多大な貢献が可能であると考えた。

## 2. 研究の目的

(1) 主目的：改訂学習指導要領の完全実施年度(小:平成23・中:平成24・高:平成25~27)にあわせ、国語科に新設された「伝統的な言語文化」の指導内容に日本の基層文化概念を位置づけ、これを核とした具体的かつ実践的な系統的实践モデルを、初等中等教育の全課程を対象に構築すること。

### (2) 目的達成のための具体的内容

「伝統的な言語文化」にかかわる新教育課程対応教科書及び研究・実践文献の悉皆調査。「伝統的な言語文化」及びそれに関連する教育内容をもった国内外の授業実践における臨床的 研究の実施と蓄積。

日本の基層文化概念を核とした「伝統的な言語文化」の系統的实践モデルの提示と教材開発。

## 3. 研究の方法

本研究は、国語科教育・民俗学・古典文学・国語学をそれぞれ専門領域とする4名の研究者が、互いの知見と方法論を生かして4つのアプローチから共通課題に取り組むとともに、その成果を学際的に統合する研究体制で進められた。研究項目は[文献調査][実践場面分析][教材等開発]の3部門に分けられ、各学校における改訂学習指導要領の完全実施年度ごとに、これらを並行して展開することとした。

各部門における主たる研究対象と方法は以下の通りである。

### [文献調査]

国語教科書の悉皆調査：主として季節感にかかる日本の伝統文化関連語彙を悉皆的に調査し、その傾向や内容特性を分析する。

関連する著書・論文等の収集

### [実践場面分析]

「伝統的な言語文化」関連の授業研究：国語教科書所収の単元を中心に、小学校から中学・高等学校にかけて授業研究を行う。調査は研究カンファレンスの手法が用いられた。

海外の学校訪問調査：過去に助成を受けて行われたイギリスへの訪問調査を中心に、当該国における関連授業実践の実態を学校全体の教育活動として捉え、包括的な事例研究を行う。研究成果は公刊する。

### [教材等開発]

「伝統的な言語文化」にかかる教育課程の状況調査：各種学校における「伝統的な言語文化」関連の教育課程について訪問調査を行う。

教材開発：教科書所収教材の分析と、新規教材の発掘、学習指導法等を開発し、実践場面で検証を行う。

#### 4. 研究成果

##### (1) 国語教科書の悉皆調査

平成 18 年度版における国語教科書の悉皆調査に続き、平成 23 年度版小学校国語教科書、及び平成 24 年度版中学校国語教科書、平成 25 年度版高等学校「国語総合」教科書の悉皆調査を実施した。

このうち、例えば小学校国語教科書については、平成 18 年度版と 23 年度版とについて、季節にかかわる伝統的な言語文化関連語彙の全県抽出を行い、その成果を学会・論文等によって公開した。本科研によって得られた知見として、以下の諸項が挙げられる。

18 年度版から 23 年度版にかけて、伝統的な言語文化関連語彙(季節にかかわる語彙に限定)の出現率は、およそ 2 倍に増加している。特に、説明的文章教材における伸び率が著しく、国語科のすべての指導場面において「伝統的な言語文化」の学習指導が行われるように配慮されている。

18 年度版で出現率の上位を占めた「雪月花」について、当該年度版では、「月」がほぼ秋の風物としてのみ取り上げられ、白を基底として全季節に関連する「月」の扱われ方に課題が残るとされた。一方、23 年度版では「月」の出現率は 18 年度版の 80 件に対し 261 件と 3.3 倍の伸び率を示している。扱われる語彙も 11 種から 28 首に増え、ほぼすべての季節で取り扱われている。

「月」と同様に「風」も 23 年度版では激増した語彙の一つである。「風」は物語作品における場面展開に際して登場し、主人公を異世界に連れて行ったり、異世界と主人公とを邂逅させたりする場面での象徴性を担っている。わが国には「風祭り」、「風送り」など、風によって疫病を送る風習が古くからあり、その文化概念がこれらの表象の基底に位置すると解釈される。

これら伝統・文化に関連する語彙を文化リテラシー(ハーシュ,1989)の観点から見た場合、改訂国語教科書には、基層文化概念として「伝統的な言語文化」の根底にある日本の美的概念や自然観を表出するものが多々埋め込まれていることが示唆される。そのうち、特に「月」は中国文化の影響を深く有しており、わが国独自の文化として固定化されがちな認識を見直させることに貢献すると同時に、文化の多様性に気付き理解するための方法知を獲得する契機ともなる。(論文 ; 発表 等)

##### (2) 「伝統的な言語文化」関連の授業研究

各学校で「伝統的な言語文化」にかかる国語科授業研究が行われた。そのうち代表的な事例を以下に示す。(論文 ; 図書 , 等)

地域伝承教材の活用(長野県佐久市立浅間中学校, 第 1 学年, 2012 年度)

『安居院神道集諏訪縁起』には、研究校を南北に挟む浅間山・蓼科山を舞台とした神話的

出来事が語られている。授業者は和漢文で記された神道集を漢字仮名交じり文に変換して口語訳を行い、これを素材として生徒に地域伝承の面白さを味わわせるための単元を開発した。授業単元は構想から 2 年をかけて行われ、教科書教材の枠を越えた地域独特の文化史的背景を中等教育で取り上げる一つの方途が見出された。

書くことの学びとの連携(長野県佐久市立青沼小学校, 第 5 学年, 2013 年度)

清少納言『枕草子』冒頭部を素材に、「夏は〇〇」という書き出しで生活場面を観察描写する活動が行われた。子供たちがイメージを富化するためのワークシートが開発され、文末を古文調で記す活動が行われた。子供たちは古文調で書く活動に意欲を示し、小学校における当該事項の学習として発展的な指導方法が示唆された。

物語の展開構造を議論する(鳥取県立鳥取東高校, 第 1 学年, 2014 年度)

『伊勢物語』を教材として、作品の展開構造に注目し、クライマックスはどこにあるかという課題によるグループ学習と全体での話し合いによって展開する実践が開発された。生徒は物語の展開に沿って登場人物の感情曲線を描き、その推移について級友と比較し、合意形成を図る。グループ学習の後で全体での話し合いとなり、クライマックスの差異が、話の展開のどこに着眼するかによって生じる仕組みを理解した。話し合いを活性化する上で古典教材が有効な作用を持ち得ることが示唆された。

落語を演じる(長野県松本市立山辺中学校, 第 1 学年, 2015 年度)

古典落語を素材にして、生徒が自らこれを演じたり、創作落語に取り組んだりする実践が開発された。本事例では、人間関係づくりに自信が持てないという課題を抱えた A 子を抽出生徒として設定し、「伝統的な言語文化」の学びを通して、彼女がいかに自信を獲得していくかという点が約 6 か月間にわたって追究された。A 子は人前で落語を演ずる活動に取り組む中で、自己表現することへの抵抗感が緩和され、自信をもって級友とかわる姿が徐々に形成されていった。

これらの実践事例はすべて VTR に記録され、研究カンファレンスを経て「伝統的な言語文化」の実践事例集として蓄積された。

##### (3) 海外調査

イギリスを中心に、「伝統的な言語文化」関連の学習指導及び教育課程が調査された。期間中の現地調査は 4 回にわたり、下記の学校が対象に選定された。

- ・ Wroxham primary school(Hertfordshire)
- ・ West byfleet Jr. school(Surrey county)
- ・ Saint John Baptist school(Surrey county)
- ・ Pyrford primary school(Surrey county)
- ・ Bishop Ramsay secondary school(London)
- ・ Leather head primary school(Surrey)

county)

- ・ Thomas More secondary school(London)
  - ・ St. Augustine primary school(Surrey county)
  - ・ George Abbot secondary school(Surrey county)
  - ・ Hallfield primary school(London)
  - ・ Cambridge University attached primary school(Cambridge)
- このほか、以下の施設・機関が調査された。
- ・ Doking Library (Surrey county)
  - ・ Working Library(Surrey county)
  - ・ Cambridge University Faculty of Education (Cambridge)
  - ・ Education, Children's and Cultural Services (London)

これらの調査による主たる研究成果は、以下の諸項である。

#### 学校文化を築く

報告者らは、現在のイギリスにおける先進的な教育実践のモデル校として知られ、その取り組みに貢献した校長が勲2等大英勲章を授与された Wroxham primary school への重点的な訪問調査を実施し、同校の教育理念の形成過程、教員組織と教育課程、実際の授業実践等について、エスノグラフィの手法による終日参加観察と関係者インタビューとによって詳細にデータを収集した。それによって同校の優れた教育実践の実現過程を把握し、学校文化と呼ぶべき共同体形成への取り組みを描き出すことに成功した。同校では、チューダー朝、ケルト民族、ロビンフッド、ロンドンバーニング、鉄器時代など、イギリス史において重要なトピックが総合学習として選択され、全教科を横断した学びが展開する。それらの学びに対する評価活動は、児童の自己評価能力育成への取り組みとして展開されている。これらを「伝統的な言語文化」の教育活動に敷衍するならば、当該指導事項がすべての言語活動を通して行われることが示唆されているのと同様に、伝統と文化への視点は汎教科的な実践トピックとして再評価されることになる。

こうした知見及び調査データは、同校の教育活動を2002年より追跡調査しているケンブリッジ大学教育学部の Mandy Swan, Susan Heart らとの協議によってまとめられ、彼らによって著された同校の研究書“*Creating Learning without Limits*”の邦訳という形で結実し、その中に上述の知見及び調査データを盛り込む形で公刊された(著書等)。

#### 人格教育としての「伝統的な言語文化」

イギリスの学校及び施設・機関への調査により、伝統と文化の学習を人格教育に接続するための教育課程、学習指導法が蓄積された。例えば調査校の一つである Bishop Ramsay 中等学校は、イギリス国教会立の学校であるが、同校の教育課程にある Religious Education (宗教教育)では、「貧困」、「差別」

等をトピックとして各宗教における教義が参照され、グローバルな視点からこれらに対する認識を深める学習が、討論とレポートによって展開している。これらの実践事例は、「伝統的な言語文化」の学習目標を根底から支える「わが国の郷土を愛する精神(教育基本法)」を涵養する上で、次代を担う児童・生徒にどのような知見や認識を育てる必要があるかという課題への重要な知見になると思われる。わが国でも「道徳」の教科化が図られ、そこにおける伝統・文化としての精神的所産(例えば「情けは人のためならず」といった倫理観)を言語文化の学びとしてどのように展開するかという課題に一定の示唆を与えている。(発表; 図書等)

#### 読書教育としての「伝統的な言語文化」

読書活動にかかる各学校の取り組みの調査と児童・生徒へのインタビュー、地域図書館との連携について調査が行われた。期間中、全英読書協会の調査データを得、わが国のそれと比較検討した。その結果、イギリスでは読書指導の推進に地元のサッカークラブがかかわっていること、識字障害の児童・生徒のための読書指導が工夫されていること、望ましい平均読書量が月4冊と低減されていることなどを解明し、「伝統的な言語文化」にかかる読書教育のあり方について、提言を行った(論文; 発表等)。

#### (4) 教材等開発

研究期間の全体を通して教材及び実践モデルの開発研究を継続した。以下にその代表的なものを示す。

#### 国語科教育の側面から

アクティブ・ラーニングとしての交流という視点から、全学校種において「伝統的な言語文化」の系統的な教科指導、実践モデルを提示した。例えば、幼・小連携の視点による伝統・文化を学ぶための図鑑の公刊(図書)、小学校における俳句実践に思考力・判断力・表現力の育成を狙った指導法の開発と公刊(図書)、交流を「広げる・深める・高める」の3局面から捉え、実践化するための研究書の公刊(図書)、「伝統的な言語文化」にかかる研究史的整理と展望(論文; 発表)、高等学校における古典嫌いを解消するための「伝統的な言語文化」の学習方法(発表)などである。なお、これらの取り組みは、本科研のメンバーが中央教育審議会教育課程部会国語ワーキングに2名選出されたことにより、次期学習指導要領に活用される。

#### 古典文学研究の側面から

主としてわが国における中国文化の受容史という側面から、上代・中古文学を対象に書儀・尺牘の受容に関する専門的な検討を重ねた。この検討の方法論として、実証科学では最も困難な「不在証明」という手法が選択され、特に高等学校教育における教材研究法への知見としてこれを提示した(論文; 発表等)。

民俗学研究の側面から

民俗学研究の方法論としてフィールド・ワーク、空間論的分析が注目され、これにかかる指導方法と教材分析例が示された。特に、高校古典の定番教材である『更級日記』の構造が対称性を有するという知見は、古典文学研究において初めての発見である(論文 )。

日本語学の側面から

「伝統的な言語文化」の基礎研究として、日本語の特性についての考察が行われた。特に、接尾辞に見られる日本語の規則性・法則性に着目し、現代語へと通じる日本語の特性解明のアプローチが追究された(論文 )。また、国語教科書における比喩表現の悉皆調査により、直喩表現の出現状況と、それにかかる実践のあり方が考察された(発表 )。これらの一部は台湾を会場とした国際学会において紹介され、日本とアジア圏とを繋ぐ教育課題として共有されている。

<引用文献>

ハーシュ, E・D, 教養が、国をつくる, 中村保男訳, TBS プリタニカ, 1989(原著1986)。

Swann, M., Peacock, A., Hart, S., Drummond, M. J., *Creating Learning without Limits*, UK: Open University Press, 2011.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計46件)

藤森裕治, 国語教科書にのぼる月-文化リテラシーとしての「伝統的な言語文化」-, 読書科学, 58(2), 印刷中, 2016, 査読有  
岩男考哲, 複合辞「という」の接続表現の用法について, 日本語文法, 16(1), 71-79, 2016, 査読有

八木雄一郎, 1960(昭和35)年高等学校学習指導要領における「古典としての古文」の成立過程-古「典」教育における古「文」教育の位置-, 日本語と日本文学, 58, 29-40, 2015, 査読有

藤森裕治, 「伝統的な言語文化」の独自性, 月刊国語教育研究, 509, 4-9, 2014, 査読有

西一夫, 平安朝漢文書簡に見る汎用と独創, 超域的日本語教育學國際學術研討會, 1, 135-142, 2014, 査読有

藤森裕治・新井浅浩, イギリスの読書教育-児童への聴き取り調査を中心に-, 読書科学, 56(1), 1-13, 2014, 査読有(執筆者はいずれも本科研メンバーにつき執筆箇所省略)

藤森裕治, 『更級日記』の対称性-空間論的分析による古典文学教材研究-, 国語科教育第75集, 88-95, 2014, 査読有

西一夫, 平安初期漢文書簡にみる書儀・尺牘の受容, 跨域性日語教育國際學術研討會論文集, 1, 161-168, 2013, 査読有

岩男考哲, 「ときたら」構文の評価的意味,

信州大学教育学部研究論集, 6, 63-74, 2013, 査読有

藤森裕治, 読解力再考, 日本語学, 30, 76-87, 2012, 査読無

[学会発表](計60件)

岩男考哲, 日本の「国語教科書」で用いられる直喩表現について, 台大日本語文創新國際學術検討会, 2015.10.25, 台湾大学  
西一夫, 『杜家立成雜書要略』の書體的正確-文体・表・受容の観点から-, 第34回和漢比較文学学会大会, 2015.9.6, 関西大学  
藤森裕治, アクティブ・ラーニングの授業づくりの型-広げる・深める・高める-, 第78回日本国語教育学会全国大会, 2015.8.1, 品川区立小中一貫校

藤森裕治, 子供の発想力を育てる, 筑波大学附属小学校初等教育研究会, 2015.2.13, 筑波大学附属小学校

藤森裕治, 高等学校の国語教育をどう創造するか, 福島県高等学校国語教育研究会総会, 2014.11.11, 福島県男女共生センター

八木雄一郎, 国語教育史の第三次的研究, 第127回全国大学国語教育学会, 2014.11.8, 筑波大学

西一夫, 空海書簡に見る書儀表現の受容, 第33回和漢比較文学学会大会, 2014.11.8, 群馬女子大学

新井浅浩, 「これからの生徒指導を考える」-イギリスのシチズンシップ教育を手掛りに-, 日本生徒指導学会関西地区研究会第7回大会, 2014.8.9, 京都教育大学

藤森裕治, 言語文化に着目した授業づくり, 第77回日本国語教育学会全国大会, 2014.8.9, 品川区立小中一貫校 日野学園

岩男考哲, 引用形式が名詞をつなぐ表現の研究-「という」「といった」と「とか」をめぐって-, 日本語文法学会, 2013.12.1, 早稲田大学

藤森裕治, 国語教科書悉皆調査による「伝統的な言語文化」関連語彙の出現状況, 2013.10.26, 広島大学

藤森裕治・新井浅浩, イギリスの読書教育, 第57回日本読書学会, 2013.8.4, 林野会館(東京都文京区)

藤森裕治, 交流の学習指導について, 第23回文教大学国文学会, 2013.8.3, 文教大学越谷キャンパス

八木雄一郎, 『少年の日の思い出』教材研究 物語の都築を書く活動を通して, 日本読書学会, 2012.8.4, 林野会館(東京都文京区)

八木雄一郎, 明治20年代の「古典」教育観 「国語」教育における中古文の位置, 第122回全国大学国語教育学会, 2012.5.27, 筑波大学

藤森裕治, イギリスの人格教育と国語教育, 第122回全国大学国語教育学会, 2012.5.26, 筑波大学

〔図書〕(計17件)

新井浅浩・押谷由夫編, 放送大学教育振興会, 道徳教育の理念と実践, 2016, 295頁, pp.109-128, 129-141

藤森裕治, 小学館, につぼんの図鑑, 2015, 191頁

藤森裕治, 明治図書, 2015, 授業づくりの知恵 60, 141頁

新井浅浩・藤森裕治・藤森千尋, 大修館書店, イギリス教育の未来を拓く小学校―「限界なき学びの創造」プロジェクト―, 2015, 260頁(全員本科研メンバーにつき執筆箇所省略)

藤森裕治・八木雄一郎・福永睦子・宮島卓朗, 東洋館出版社, 交流―広げる・深める。高める―, 2015, 141頁, 藤森 pp.8-19, 62-69; 八木 pp.70-91

藤森裕治, 東洋館出版社, すぐれた論理は美しい―Bマップ法でひらくことばの学び―, 2013, 212頁

〔その他〕

(1) につぼんの図鑑の報道

- ・朝イチ, 日本放送協会, 2015.4.17 放送
- ・産経新聞朝刊, 2015.4.29 報道
- ・SANSTAR WEEKEND JOURNEY, FM 東京系列 2015.5.10 放送 など。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤森 裕治 (FUJIMORI, Yuji)  
信州大学・学術研究院教育学系・教授  
研究者番号: 00313817

(2) 研究分担者

西 一夫 (NISHI, Kazuo)  
信州大学・学術研究院教育学系・教授  
研究者番号: 20422701

新井 浅浩 (ARAI, Asahiro)  
城西大学・経営学部・教授  
研究者番号: 80269357  
(H25 H27)

岩男 考哲 (IWAO, Takanori)  
信州大学・学術研究院教育学系・准教授  
研究者番号: 30578274

八木 雄一郎 (YAGI, Yuitirou)  
信州大学・学術研究院教育学系・准教授  
研究者番号: 80571322

藤森 千尋 (FUJIMORI, Chihiro)  
埼玉医科大学・医学部・准教授  
研究者番号: 10707657  
(H25)